http://decfamily.p1.bindsite.jp/2018/

We 35R

No.398　18/06/27

明日を前に

合唱祭の思い出を記した過去の通信を再掲する。去年の237号でも引用しており、それとまったく同じ内容であるが、明日の本番を前にして、ぜひもう一度読んでみてほしい。

＊

私が前に担任をした時、そのクラスが２年生の時に歌ったのが「はじまり」である。合唱祭委員はとてもしっかりした女子で、各パートの歌唱指導をした上に、自ら指揮も担当した。２年生は部活で中心的な役割を果たすこともあって、思うように練習に人が集まらないこともあったが、彼女は（自分の部活もこなしながら）諦めることなくクラスを叱咤激励し、練習計画を立て、クラスをまとめていった。しかし、残念ながら結果は学年７位…。難しい曲である。抑揚をたっぷりとつけ、抒情的かつ力強く表現することが求められるのだが、それが今一つだったのだろう。

合唱祭の翌日、めったに休むことのないその女子が欠席…。あの時の朝のＴの暗い雰囲気は、今でも思い出せる。クラス全員が彼女のがんばりを知っていたから、自分たちの不甲斐なさが、彼女をガッカリさせたに違いないと感じていたのである。

ただ、本人は「休んだのはそんなんじゃないよ、風邪だよ」と翌日登校した時には、みんなに明るく説明していたが…。

日比谷は２・３年生でクラス替えはない。３年生になって、再び彼女は合唱祭委員に立候補した。そしてその時、誰も何も言わなかったが、心の中では「彼女のためにも必ずリベンジする！」と誓っていたにちがいない。私はそんな感じを受けた。

しかし、クラス替えがないということは、練習成果がそのまま結果に結びつく合唱では、２年目にもそうやすやすリベンジなどできるはずがないことを意味する。ましてや３年生、どのクラスも最後の合唱祭ということで、優勝目指して練習を重ねてくる。彼女のためにリベンジしようというクラス全員の気持ちをうれしくは感じながらも、私はそうやすやすとはいかないだろうし、力みすぎて（去年よりも悪い）学年８位という可能性だってあると危ぶんでいた。

本番が近づき、イイ仕上がりであることは感じていたが、さてどうなることかと、当日はドキドキであった…。

そして、結果は「総合１位」！　前年の学年７位から優勝というのは、かつてない結果だそうである。

合唱祭が終わって日比谷公会堂を出た時、日比谷公園の真ん中でクラス全員が輪を作り、合唱祭委員一人一人がスピーチをした。彼女のスピーチが終わったあと、クラスみんなで彼女の胴上げをした。スカートだからというので、男子の一人が自分のはいていたズボンを脱いで彼女にはかせてやった。あの時のみんなの笑顔は決して忘れることはないだろう、私も、そしてクラスの全員も…。

優勝は結果である。しかし、大切なのは「思い」である。前のクラスの合唱祭に対する思い、それは「友だち」であった。そして、その思いを優勝という形で表現したのである。私は彼女のことを、そして、そういうクラスのことを、誇らしく思い出すのである。

＊

さて、我々の思いは？「連覇」？　いやいや、今までで最高の演奏をすることである。